

刊行にあたって

本書のテーマは表題の通り男性介護者支援の正当性を問うことである。

「なぜ男性介護者の支援なのか」—この一見単純に見えるこの問い掛けに応えるのは意外に難しく、もつれた糸をほぐすかのような複雑な作業を要する。介護と「仕事・暮らし・社会」という今日的で且つ論争的なテーマ性に突き刺さるような優れたヒントが潜んでいるように思われる。限られた紙幅ではあるが少しコメントしておきたい。

少し違う視点から考えてみようと思う。

男女雇用機会均等法（1985年）が施行され、雇用における男女差別の撤廃というテーマがようやく表舞台にあがった。しかし、採用や処遇面での局地的の前進はあったものの母性保護などの支援ではむしろ極端に後退し雇用環境での男女平等にはなお道遠し、課題を山積させている。「24時間戦えますか!」とビジネスマンを鼓舞したドリンク剤のCMのように、余暇も家族も社会活動もすべてを犠牲にして仕事一筋に適合させるかのような従来の男社会で見られた働き方のスタイル。「私つくる人、僕食べる人」と性別役割分業を刷り込んだ食品CMのような働き方と暮らし方のシステム。このスタイルとシステムの是非を問い、正していくということなしに女性もただその道をなぞっていくということだけでは、男女の雇用環境の平等化や「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」には影響することはなかったのだ。女性の働き方の男性化とでもいうようなワーク・ライフ・アンバランスな働き方の蔓延は、男女を問わず雇用と就労、生活の環境をますます窮屈なものとしているようだ。

このようなアプローチの限界が広く合意されたのだろう、「男のように働く」キャリア女性の支援という以上に、最近では働き方の多様性を強調する「ダイバーシティ推進」がキーワードとなって広がっている。24時間会社漬けのようないわゆる「男性並み」働き方を前提にすると、「仕事と生活の調和（ワークライフバランス）」にも支障がでるといことだろう。男女ともに家族的責任の全うなど夢物語となる。また私たちのフィールドである男性介護者のように、従来の「男性並みに」働くことのできない人たちの存在もクローズアップされてきた。性別に関わらず多様な労働者のニーズに着目した人事政策や職場マネジメントの重要性への着目である。

こうした女性の労働環境と、全く同様の構造を男性の介護環境も抱えているようである。男女が共に介護を担う時代、というのはこれまでのように過酷な家族介護を当然視し、またこれを正当化するというのではないはずである。男女が共に手を携えて、家族と自分の老後を安心して託すことが可能な、これまでとは違う新しい介護のスタイルとシステムを創造していくことに他ならない。すなわち、100万人を超える男性のこうした介護と暮らしの実態が教えていることは、働く女性たちが「男性のような働き方」に異議申し立てしているように、男性もまた「(これまでの)女性と同じように」介護しようということではないということではないか。これまでの女性たちが担ってきたように無償且つ無制限・無限定の家族介護労働によってのみ成り立ってきた介護のスタイルとシステムをただなぞっていただけでは、いまこの社会が抱えている深刻な介護問題はけっして解決しないということではないか。男女が共に介護を担う時代ということは、介護に耐性力のある新しい社会の幕開けとなるはずだ。だとすれば、「ケアメンを生きる」という男性介護者の新しい「生き方モデル」は、上記の文脈に照らせば、インパクトの大きな創造性豊かな意味ある生き方に連なっていく。介護する／されるということを至極当たり前のように社会の五臓六腑に埋め込んでいくという、この社会の「これまで」と「これから」を画するような巨大な「未完のプロジェクト」だ。

本書は、以上の問題意識をもって開催された男性介護研究会シンポジウム「男性支援の可能性」(2014年3月9日 男性介護者と支援者の全国ネットワーク・立命館大学人間科学研究所男性介護研究会共催、公益財団法人キリン福祉財団助成)での議論をもとに編集した。当シンポジウムは、編者が参加する研究プロジェクト：文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」の一環としても行われた。男性介護者をめぐる問題において研究者と実務家・当事者が集った、まさに「〈学＝実〉連環」を体現したシンポジウムの記録である。

最後に、講演・報告内容に加筆修正の労を頂いた、伊藤公雄氏、今井まゆり氏、小林裕子氏、そして本誌への掲載を快く許可頂いた男性介護者と支援者の全国ネットワーク及び公益財団法人キリン福祉財団に対し、心から感謝申し上げたい。

2015年3月1日

立命館大学産業社会学部 津止 正敏